材料は Hortus Botanicus Universitatis Portucalensis から入手したものを使用した。

前葉体は心臓形で，頂部は深くあるいはやや深く，急に狭く彎入し，両翼片の内側辺は生長点の上方において平行である。下部はくさび形に狭って原絲体に移行する。原絲体は 2～4 個の細胞よりなり，基原細胞は円柱状に胞子外殻より突出する。両翼は蝶翼状に著しく強く斜上し，下部はさや状をなし，翼縁は不整波状をなす。翼細胞は等方形で分裂列は明瞭である。翼縁の細胞は等方形で，やや長方形になる傾向があり，殆んど側方に突出することなく縁は平滑であり，その縁側は微かに凹形または波形をなす。生長点附近の縁には少数個の多細胞毛を生ずる。多細胞毛は 3～5 個の細胞列よりなり，一般に生長点の方向に彎曲し，各細胞は核および翼細胞より小形の葉緑粒を含み，頂の細胞は特に球形で内容は退化し，顆粒状の物質を含む。仮根は褐色を呈し，中軸帯に沿うて中褥の下部にまで亘って生ずる。中褥は小形で，葉状部の中部から頂に達する長倒卵形の褥をなし，3～4 層の細胞よりなる。造卵器は中軸に集って中褥の中部以上に比較的少数個生じ，頸部はやせて細長く，4 系列をなす頸細胞は前列 5～6 個，後列 4～5 個よりなり，最下位のものは大形で頸部の座をなす。造精器は中軸帯に沿うて中褥の下部にまで亘って生じ，上方では造卵器群に接近することがあるが，これに接しまたは混生することはない。球形で直径 70～80 μ あり，底細胞は環細胞と等幅・等高で，その上膜は陥没して底膜にまで達する。

本種の前葉体は既報の *Ceterach officinarum* によく類似するが，多細胞毛は頂部附近の翼細胞から直接に数細胞の列よりなる突起として生じ，既報のように縁の一部が鱗片状に突出してその先方が細胞列をなして伸び多細胞毛となることがないことによって区別される。

○オノエヤナギの一奇形品について（木村有香） Arika KIMURA: De *Salicis sachalinensis* forma monstrosa.

蛇竜柳の名で生花用としてしばしば花屋にあらわれるヤナギにオノエヤナギの枝の帯化品がある。未記載のものと思われるので下記の学名を与えたい。

Salix sachalinensis Fr. Schmidt forma **ligulata** Kimura form. nov.——Ramulis superne fasciatione gradatim dilatatis diagnoscenda. Folia et amenta ut in typica, sed in partibus dilatatis ramulorum conferta.

Hab. in Japonia. Prov. Kusiro: in paludibus Kiritappu, spontanea, (A. Kimura n. 2000 st. 21 Mai. 1931 [holotypus] in herb. A. Kimura, Tohoku Univ.).——Prov. Rikuzen: Sendai, cult., (A. Kimura n. 1964 ♂ 15 Apr. 1931).

本植物は一種の奇形品であり野生も知られている。ヤナギには甚だしばしば奇形が見られその出現の形式は大体きまっている。Toepffer (Salicologische Mitteilungen I, 1908; Salices Bavariae 1915) はこの各形式はヤナギの種類の如何を問わず同一の名称をもって表現した方が理解が容易でよかろうと主張し，帯化品に対し "ligulata" なる称呼を採用した。筆者はヤナギに関する限りこれに賛意を表する。